

# 清原道壽先生を悼む

佐々木 享

清原道壽（みちひさ）先生が去る6月18日に逝去された。あと二ヶ月で92歳になられるところだったという。88歳になって大著『昭和技術教育史』（1998年、農文協）をまとめられたことには感服したが、2000年3月26日の産業教育研究連盟創立50周年のパーティーに、90歳の先生が杖もつかずに登場された時の驚きも忘れられない。これがお姿を拝見した最後になった。技術教育、職業指導の大先達を失なったことを心から悼む。

清原先生は1949年に、戦後日本の民間教育研究団体の草分けである職業教育研究会（現在の産教連の前身）を創設され、戦後生まれで悩みの多かった職業科の教育に携わる教師たちに指導と援助の手を差しのべられた。

私が清原先生に初めてお目にかかったのは中学校の職業科の教師になって4年目の1959年末だった。現場教師に優しい先生だった。私は間もなく産教連に加盟したが、60年代以降の活動の場は技教研や教科研が主となった関係で、直接ご指導頂く機会は少なかった。しかし、以来40年間、陰に陽にたくさんのことを学ばせて頂いた。

1950～60年代の清原先生と長谷川淳先生（後、技教研の初代代表委員）は、当時ともに東京工業大学助教授で、ともに技術教育分野の数少ない研究者であり指導者だった。1956年に刊行された宮原誠一編『生産教育』（国土社）には清原先生が「明治以来の工作教育」を、長谷川先生が「明治以来の技術教育」を書いておられた。これが両先生の棲み分けだったのかも知れない、と私は納得していた。これと似たような分担は、『岩波講座現代教育学』第11巻「技術と教育」（1961年）や平凡社の

『世界大百科事典』の執筆項目にまで及んでいた。私たちはこうした技術教育研究の大先達に恵まれて育った。

清原先生に学ぶべきことは多いが、一つだけ記す。先生はいわゆるエリートコースであった東京帝国大学文学部を卒業後、自ら希望して東京の小学校の教師となられた。ことに下町の子どもたちの職業指導に意を用いられた。先生のひたむきで誠実な教育実践は官憲の目にとまり、1943年5月に治安維持法違反容疑で逮捕された。先生は天皇制軍国主義権力の弾圧に屈することなく志操をまもり貫き通された。天皇制権力は敗戦後もなお国体護持に固執していたから、先生の釈放は、1945年10月のGHQによる全思想犯釈放指令をまたねばならなかった。あの飄々としたお体のうちに強靱な思想が秘められていたのだ。私の知る限り、先生はこうした自己の経歴を語ったり書いたりすることはなかったし、思想を押しつけることもなかった。これが清原先生の真骨頂だったのであろう。私たちがこうした先生の前半生を詳しく知り得るのは、長女の清原れい子さんが『雨の日の出獄』（1996年、築地書館）をまとめて下さったからである。

先生は戦後も小学校に勤務され、やがて学制改革で新設された目黒区立第六中学校に転じ、職業科と職業指導に取り組みされた。招かれて大学に転じたのはその後のことである。

追悼のことば（『産業教育研究』第32巻第2号）で鈴木寿雄氏（若き日に目黒六中に清原先生とともに勤務された。元文部省教科調査官）は、有事立法などきなくさい動きがある中で、先生の貴重な体験を無駄にしてはいけなと語っている。同感である。

（前技術教育研究会代表委員）